

## 第二部 世界・テキスト・記号

1 構造主義再考	小井 厚子
2 『ヴァルドマール』のテキスト分析について	金岡 喜代美
3 バルトのテキスト理論	中田 晶子
4 トドロフの構造主義	林 美樹
5 構造主義の興亡	進藤 鈴子

### 1 構造主義再考

小井 厚子

フランスを中心に構造主義が流行したのは1960年代であるが、その後の英米を含めた批評家たちの多くは、否定的であれ肯定的であれ、構造主義に対してかなり意識的である。今、構造主義を振り返って考えてみたいと思うのは、それで批評の現況の一端を明らかにすることができると思うからである。

「構造主義」という言葉を聞くと、人は、レヴィ＝ストロース (Lévi-Strauss) の親族構造、あるいは、物語の構造分析を思い浮かべるかもしれない。しかし、これらは構造主義の領域内にあっても、構造主義そのものではない。これまでに構造主義定義の試みが多くなされてきたが、この現象は逆にその困難さを示している。それが困難なのは、構造主義がさまざまな分野にわたっているからではなく、世界に対する姿勢と関わっているからである。人々は、絶対なるものであった世界や人間にではなく、それらを支える構造に目を向けるようになったのである。従って、「構造主義とは何か」という問いは、構造主義の扱う個々のトピックの説明であったり、「構造」の定義ではあっても<sup>(1)</sup>、絶対なる答えを得ることはない。

構造主義的文学研究に触れる前に、論理の展開上、フェルディナン・ド・ソシュール (Ferdinand de Saussure) の言語理論である、記号の恣意性とラング

とパロールについて述べておきたい。まず、記号の恣意性について例を挙げてみると、これは、「木」という言語記号と木というものの結びつきには必然性がないということである<sup>(2)</sup>。記号は他の記号内容と対立し差異をもつことによって存在する。音素という、対立と差異に基づく形式によって構成されている記号表現についても同様のことがあてはまる。言語記号の「木」が実際の木を意味するのは、その記号の差異に基づく構造によるのである。

ラングは、「観念を表わす記号の体系」であり、そこから「社会内における記号の一生を研究する学問」<sup>(3)</sup>が求められるようになる。言語学はラングを対象とし、それらが文を生み出す結合の可能性を研究することを目指している。構造的要素としての差異は、記号を対立させると同時に結合させるのである。しかし、結合の可能性とは結合を強制させる力、人に世界の見方を押しつけるものである。世界の見方であると言われる構造主義が、言語研究を無視できないのはこの点にある。そして、レヴィ＝ストロースは、言語と社会制度のあいだに本質的な相関関係を認めることによって、構造人類学をうちたてたのである。

一方、ラングの体系に基づいて生み出される個人の発話行為であるパロールは、言語学の対象とはならない。有限であるラングと異なり、パロールは無限に存在し、体系を成さないからである。<sup>(4)</sup>しかし、パロールがあったからこそラングが成立したとも言える。ラングとパロールはニワトリと卵の関係であって、ラングからはみ出て生み出されたパロールも、度々用いられることによって体系内に組み入れられ、制度となりうる。パロールに絶えずその境界を侵されているラングは固定した体系ではなく、それを換えようとしているのは、それ自身に内在する力そのものである。<sup>(5)</sup>つまり言語行為には、言語を制度化し、その形式を変えない規則によって支配される創造性と、その規則を換えるように働く創造性とがある。いわゆる構造主義言語学は前者を対象とし、記号学は後者にとってより有効となるであろう。しかし、前者の研究がある程度成果をあげていなければ、後者の研究は進まないのである。同様のことが文学研究にあてはまる。

文学は、言語を素材とし、その批評も言語によるという意味で特殊な文化現

象である。詩人の用いるパロールは、ラングに基づいてはいるが、それを超えていることも非常に多い。しかし、それらは文字化されることによって制度——社会に通用する言語の——ではなく、文学の——となる。この制度内の構造が、文学テキストに世界を指示させるのである。構造主義的と言われる文学研究は、世界を認識する仕方を強制し、且つ、文学たらしめる体系を求めて、言語学の方法を援用しつつ物語の構造分析を試みる。この種の研究の先駆となったのがプロップ (V. Propp) の『民話の形態論』である。

彼が着目したのは、民話の外面的な面ではなく、固有の「構造」である。民話の構造は、登場人物の所行である機能の連鎖と、その役割によって記述されている。この方法は、バルト (R. Barthes), ブレモン (C. Bremon), トドロフ (T. Todorov) らの研究の出発点となった。<sup>(7)</sup>

言語学が科学であろうとしたように、これらの文学研究も科学であるための普遍性と精ちな理論を求めた。文学研究がその対象を民話からさらに広げ、構造の記述を論理的にすればする程、困難につき当たった。規則にあてはまらぬテキストが多すぎ、その度に体系は組み換えや組み入れを迫られる。有限個であるはずの体系が無限になりかねないのである。

文学テキストが言語記号から成り立ち、テキストも差異によって扱えられる以上、文学テキスト総体の背後には、確かに体系が存在する。あくまでも体系の確立とその記述を試みるトドロフは、言語記号の体系と文学総体の体系のレベルの混合に注意しつつ、ジャンルを設定することで、仮説としての詩学を論じることになる。一方バルトは、文学総体の体系外にあって絶えずそれを侵犯するテキストを扱うことになる。

(註)

- (1) cf. J. M. ドムナック編 伊東守男・谷亀利一訳『構造主義とは何か』(東京: サイマル出版会, 1968). ジャン=ピヨン編 北沢方邦他訳『構造主義とは何か』(東京: みすず書房, 1968). フランソワ・ヴァール他著 佐々木明他訳『構造主義』(東京: 筑摩書房, 1978). これら3書は、いずれも、掲載論文全体から定義を引き出す作業を読者に委ねている。

- (2) cf. Ferdinand de Saussure, trans. Wade Baskin, *Course in General Linguistics*. (New York: McGraw-Hill, 1966), pp. 65-70.
- (3) Saussure, p. 16.
- (4) cf. Saussure, pp. 18-20.
- (5) cf. Saussure, p. 23.
- (6) 彼らの主著をあげると, Roland Barthes, "Introduction à l'analyse structurale des récits," *Communication*, 8. 1966. 邦訳: 花輪光訳「物語の構造分析序説」『物語の構造分析』(東京: みすず書房, 1979), Claude Bremond, "Le message naratif," *Communication* 4, 1964. Tzvetan Todorov, *Grammaire du Décaméron* (The Hague: Mouton, 1969).

## 2 『ヴァルドマール』のテキスト分析について

金岡 喜代美

ロラン・バルトが『S/Z』(1970)<sup>(1)</sup>で実践したテキスト分析のエッセンスを凝縮したのが『ポーのヴァルドマールのテキスト分析』(1973)<sup>(2)</sup>である。バルトは、テキストの概念を、意味が作用しつつある空間、過程、すなわち、「意味形成性」のことであるとし、テキストを、ある完結した、閉じた生産物としてではなく、進行中の生産行為とみなす。テキスト分析は、作品の構造を記述するのではなく、テキストの可動的な構造化作用を生みだそうと努める。それが目ざすところは、テキストの特定の、あるいは、一つの意味を見出すことではなく、テキストの複数性、その「意味形成性」の始まりを捉えることである。

テキスト分析では、作品をいくつものレクシ(lexie)に切り分け、それぞれのレクシについて、そのレクシが生ぜしめる第二次的な意味、すなわち、コンテキストを観察する。コードとは、これらの第二次的な意味が連合する場である。テキスト分析のねらいは、テキストの構造を再生成することではなく、テキストの構造化のあとをたどってゆくことであるから、作品の分析は、最初のレクシから順番に一つずつ行われる。その途中でいくつかの意味を見落とし